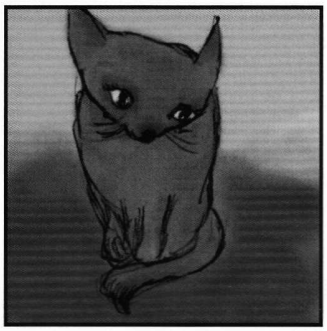
タレント・作家

志茂田景樹さん

・KAGEKI SHIMODA・

感度のいいアンテナとイメージする力が、新時代の美人の必須条件

機智と愛情に溢れた、Twitterでの人生相談が名言揃いだと話題の、作家・志茂田景樹さん。人生の達人、志茂田さんが見つめる、この先の美人像とは？



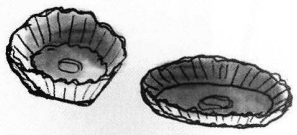
ココロに染みいる名言ばかりのTwitterから、ちょこっと抜粋☆

自分の心を、嬉しいときには褒めてやり、悲しいときには慰めてやり、辛いときにはかばってやる。すると、心なんて単純だから気をよくしてどんどん豊かになる。心を責めて複雑怪奇にしてはいけない。

イケメンばかり追いかける女はイケメンが好きというより、自分の相手はいつもイケメンであることを同性に見せつけたいだけなの。同じことは常に見栄えのいい女を選ぶ男にも言える。周りの男達に自慢したい。ほんとうに好きになる相手は、なんであんな人を選んだの、って傍目には映るもんさ。

いい結果を出すには頑張り過ぎないことだよ。結果が見えてこないことは、間違った数式で懸命に正解を出そうとしていることに似ている。頑張らないで時間を置く。冷静になれて数式の誤りに気づく。頑張らないと安心できない人は、ここで止まっておこう、と自分に言い聞かせる習慣をつけたほうがいい。

心が凹んでるときはね、元気を出そうなんて無理しなくていいよ。ただ、裏道でも公園でもいい。ぶらぶら歩いてみようか。いろいろと気づきがあるんだ。冬なのに敷石の間から顔を出している雑草に、いのちのたくましさを教えられてね、そっか、とついさっきまでの自分を、ばっかみたい、と思うもの。

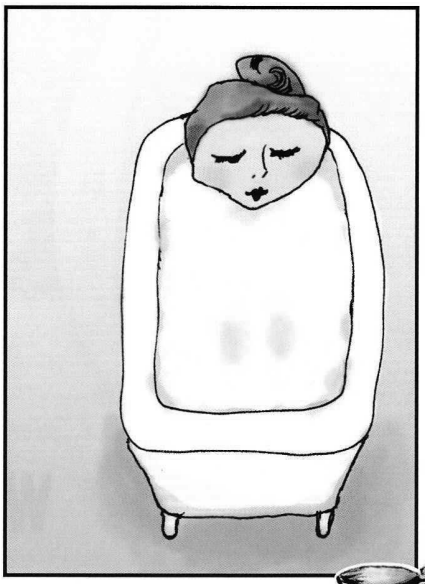


歌は世につれ、じゃないですけどね。美も世につれ、でね。これから10年も経てば、今の美人は、美人なんて言われなくなっていくんじゃないでしょうか。これからは、知識も知恵もそれなりに身につけた、才色兼備の女性の時代。昔なら、紫式部辺りが下膨れの顔で才人ということで才色兼備ということになるんでしょうけれど。新しい才色兼備の時代が始まるんじゃないかと、僕は期待混じりに推理しています。新しい才色兼備に必要なのは、何と言っても、感度のいいアンテナです。目に見えないけれど四方八方にアンテナを張り巡らせている、というような。今までの美人というのはどちらかというと、例えばひとつの美容法があると、それひと筋に信奉しやすいタイプ。反面、その効果が出ないと、すぐにほかのものに乗り換えてしまう。しかし、現代の情報過多社会の中にあっては、自分の美を磨くためのヒントになるもの、養分になるものを絶えず捉えて行けるような、アンテナがないとだめかなあ、と思うのです。才気煥発という

“お風呂で綺麗な肌の人を思い浮かべながら毎日マッサージしています”

言葉がありますが、そういう感度の良さが重要になっていく。なぜかって？　人は、美しさを評価するときに、表面ではなくて、皮膚の下、つまり内側の部分を捉えているのではないかと僕は思う。そのときに、どこを見てそれを判断していると思いますか。瞳の輝きです。瞳の輝きというのは、内側の輝きから来ているもの。「この人の目は綺麗だな」と感じるとき、それは、眼球の光ではなくて内面のきらっとした光を感じ取っているんです。つまり、その人の内面の充実度が表れている。例えばオーラなんかもそうですね。ですから人に見られているときは、表面を見られているわけではなく、自分の内側を見られているという感覚を、意識しなければいけません。ある意味では、全身を瞳にしてほしいんですね。そういう、例えて言うならば、皮膚表面ではなく、皮膚の下5ミリのところを光らせようと注意を払っていれば、その努力は、にじみ出てくるものです。見る人が見ればわかる。そんなものが、これからの美人の新定義になっていくのではないかと僕は思います。

内面を光らせるには、感性を磨くことでしょうね。美容整形のように覆い隠したりごまかしたりするのではなく、素のままで美しくなる、というのが鍵です。そんな真の美しさを引き出すには、イメージしないとダメ。僕はね、お風呂で石鹸をほとんど使わずに、マッサージをするんですけど、そのときは、誰か皮膚の綺麗な30代、40代くらいの人をイメージします。その皮膚を、自分のほうに取り込むぞ、取り込むぞ、って言いながらマッ



サージする。人間て、とてもお人好しで愚かだから、その気になると、本当にそういう状態になっていくんです。自己暗示、とも言いますね。これからの**美人は、そんな自己暗示能力がなければ、到底ダメです。**張り巡らせたアンテナで、「この人は黒目の輝きがキラキラしている」とか、「この人の髪の生え際は自分が小さな虫だったら入り込みたいようだ」とか、魅力的なお手本をまずはキャッチする。これには感性が必要です。その上で、どのパーツがどうなっていきたいかという、自分なりの理想というものの「像」をイメージする。そしてその像に、自分を当てはめて行こうと意識する。——もちろん、急にいっぺんには当てはまらないから、初めは、その理想像から遥かに外れた自分でいいんですよ。だけど、それをイメージしながら願う努力をしていると、そういう方向になっていくものなんですね。そうすると、そこに自信が生まれて来る。

言っておきますが、周りの男性がチヤホヤしてくれるのを自分の魅力だと信じている、そんなのは本物の自信ではありません。これからの美人は、本物の自信を持たなければ。本物であればあるほど、自信なんて言葉は意識しないもんです。慢心とか過信とか、そういうものとはかけ離れていて、「素のままの自分でいいんじゃないか」というのが、本物の自信です。ですから先程も申し上げたように、隠すのではなく、「魅せていく」のが、これからの美人です。

今、アンチエイジングが注目されていますが、これは、美人の定義が変わって行く、ひとつの前触れかなと思います。なぜなら、アンチエイジングに強く影響を与えるのは、生活習慣。それこそ、内面の健康が皮膚の外側に表れるんですね。それを知った女性は、日々の生活や食事について気を使うようになるけれど、それが決して苦痛にはならない。自分がいつまでも若く美しくいたいという目標があるから。一方で、目の前の誘惑に負けて、ついケーキバイキングでケーキをばかばか食べてしまうような人も居ます。これからは、**美人とそうでない人の差が開いていく、「美の格差社会」**になっていきます。要するに、美を強く目指して、**アンテナから得た情報を積極的に実践していく人と、そうでなくて、流されるままに刹那的に生きる人と差がついて行く**でしょうね。

ツイッターで、たまに結婚についての相談を受けます。「どうすれば幸せな結婚が出来るのか」って。それにはやはり、結婚に対する自分なりの明確なイメージを描けないといけない。プロジェクトで言えば、基本計画にあたるのがそれ。要するに、設計図です。けれど日本人の女性の場合は、ファッションでもそうですが、周りを見て、「みんなが持っているから自分も持たなきゃ」ということで、安心したがる傾向がある。そもそも、周りと比べてしまうということは、自信がないんですね。だけど比べる必要はないんです。それぞれの人生なのだから。それに、そういう生き方だと、**自分自身の設計図ではなく他人の尺度で生きているから、どこかチグハグになってしまう。**ですから、美しさも結婚でも、自分らしさをどう生かしていくか、ということを考えていけばいいんです。「美人とはこういう外見をしているものだ」と思い込むから、それにあてはまらないと、自分は不美人だと思ってしまう。そうではなくて、生まれて来た自分の顔がいちばんいいと思えばいいんですよ。個性があることを良しとする。自分の素のまま、つまり「そのまま」をどう美しく見てもらうか。これからは、そこで勝負する時代になると思います。

NEW DEFINITION OF BEAUTY

“生まれて来た自分の顔が
いちばん美しいと
思えばいいんですよ”

志茂田景樹

PROFILE

1940年生まれ。静岡県出身。作家としての執筆活動のほか、タレントとしても活躍。1980年、『黄色い牙』で直木賞を受賞。1999年には不登校の子供たちに絵本を読み聞かせる、『よい子に読み聞かせ隊』結成。Twitterでの真摯な人生相談は、フォロワー20万人を超える人気ぶり。